

II 特別シリーズII

※現在、さくらサイエンスプランは新型コロナウイルスの感染防止のため、今年度のプログラムの実施を延期しています。

科学技術
振興機構

『さくらサイエンスプラン』友情と感激

第222回

群馬大学の活動報告



海野雅史
(群馬大学
大学院理工学部
分子科学部門教授)

中国の厦門大学から
若手教員と学生を受入れ

◎ 中国でも有数の
化学研究レベルを誇る厦門大学

厦門大学と群馬大学の連携の歴史は長く、筆者が助手の頃、大学院生として群馬大学に滞在した王先生が、現在、厦門大学で教授として教鞭をとっておられる関係もあり、群馬大学から毎年のように学生を派遣している。一方、受け入れについては数年前に王先生の指導教員であった角田先生が、さくらサイエンスプランの支援で学生と若手教員を招へいしているが、最近では訪問が途絶えていた。令和元年に、両大学持ち回りで開催している合同シンポジウムの開催を機に、ぜひ学生さんにも来てもらおうということで、2019年11月の中旬に本プログラムを実施した。厦門大学では中国でも化学系の研究レベルがトップ3に入るほど評価が高く、今後さらには連携が強化されることが期待されている。

◎ 群馬大―厦門大合同シンポジウム

今回の訪問における大きな行事は合同シンポジウムの開催である。今回さくらサイエンスで学生たちが来日するこの機会を利用して、厦門大学の先生方にも短期間であるが来日していただき、両大学合同でシンポジウムを開催した。

まず、各大学の学部生が1名ずつ、所属する大学の紹介を行った。引き続き研究発表のセッションに移り、大学院生が行っている研究について発表した。いずれも化学に関する発表であるが、分野は生物化学から無機化学、有機化学と多岐にわたり、厦門大学の学生5名と群馬大学の学生3名は、教員からの質問

プログラム	1日目	到着 夜間到着のため、成田泊
	2日目	午前中バスで群馬大学のある桐生に移動 午後分子科学部門の研究室見学
	3日目	群馬大学 - 厦門大学共同シンポジウムに参加 討論・情報交換
	4日目	日光地区の見学会
	5日目	東京に移動 日本科学未来館見学
	6日目	桐生市内の歴史施設見学
	7日目	バスで成田空港に移動 帰国

にも堂々と答えていた。次いで行われた教員による発表では、厦門大学副学長でもある江先生の有機合成を基盤とした超分子光化学の発表をはじめ、いずれも双方の大学の科学研究を代表する教員が専門の研究について発表した。参加した学生にとっても、最新の研究成果に触れ、将来の設計に大きな動機づけとなったことであろう。

◎ 群馬大見学と日本文化ツアー

来訪者は、群馬大学理工学部内の記念館(群馬大学工学部同窓記念会館)の見学も行った。厦門大学も群馬大学とほぼ同じ歴史(2021年で百周年)を持つ大学であるが、百年前の施設が残っている大学はアジアでも珍しく、チューター様式の建築物を、興味を持って見学していた。また、同記念館内には群馬大学理工学部の前身である桐生高等染織学校が設立された1915年(大正4年)から1946年(昭和21年)頃までの約30年間に蒐集された染料コレクションが展示され、



栃木県日光市の華厳の滝にて



合同シンポジウム後に記念館の前で



東京・お台場の日本科学未来館にて



真剣な面持ちで記念館を見学

4000点以上のサンプルが保存、整理されている。染料は化学物質であり、馴染みのある構造式も見受けられるため、来訪者も注意深く試料に見入っていた。

中国からの旅行者は増えているが、やはり国内移動の困難さから、訪問先は大都市近辺の観光地に偏っているように思う。今回は都市部からはあまりアクセスのよくない日光の史跡を訪問するプログラムも加えた。幸いオフシーズンであったこともあり、東照宮、龍頭の滝、華厳の滝を回ることができた。特に東照宮は平成の大改修を終えたばかりであり、

金と白の眩しいばかりの建物に、皆、圧倒されていたようである。ちなみに中国は広大な国土を擁するが、あまり高い山はなく、厦門大学の学生にとっても、大きな滝は非常に珍しかったようである。

また、活動中の週末を利用して、日本科学未来館(東京都江東区青海)への訪問も実現した。館内では理系の学生らしく、いろいろな展示を、時間を気にすることなく興味津々で見学し、集合時間に遅れる学生もいるほどであった。お台場にはユニークな形状の建物も多く、桐生では得られない日本の別の面を

見ることができたことは、忘れたくない経験となったことであろう。

◎ 将来に向けて

1週間という短い時間ではあったが、研究と文化、大規模なプログラムを1つのトラブルや事故もなくこなすことができた。2年後には群馬大学から厦門大学に学術・教員が来訪し、第4回の合同シンポジウムが開催されること、決定しており、今後さらなる連携を深めることが期待できる。

